

中国は怖い？



河津 啓介

「中国生活は大変でしょうね」。北京の日本人駐在員が赴任前や一時帰国の際によく耳にする言葉だ。私もその一人。

歴史認識を巡る溝や日本人母子が狙われた襲撃事件、不透明な邦人拘束、さらには中国駐大阪総領事の常軌を逸した投稿。こうした現実を過小評価できないし、不安が全くないと言えはうそになる。

ただ、現地で暮らす感覚からすると、日本では「中国は怖い」というイメージが独り歩きしているように思う。中国の治安は決して悪くはない。都市部では夜に出歩いても危険を感じることはまれだ。少なくとも私個人は今回の赴任で日本人であることを理由に不愉快な思いをした経験はなかった。

中国の対日感情は多面的で、矛盾をはらんでおり、どう理解すべきかとまどうことが少なくない。

一方で、隣国との向き合い方に悩むのは、日本人の側だけではないようだ。

中国の女性エコノミストが最近、ブログに興味深い投稿をしていた。

小学生の息子を持つこの女性は、日本や米国への反感をおおるネット上の「ヘイト言論」が子ども身近にあふれていることに心を痛めていた。

どうやって歴史問題について我が子に伝えるかに悩んだ末、3泊4日の日本旅行を思い立った。

旅行初日、その子は日本の第一印象を「中国人と日本人は似ているから外国に來た感じがしない」と語った。夕飯では「和牛」をとても気に入る、ホテルの部屋に戻ると「ネットの情報はうのみにできないね」と大人びた感想を口にしたという。

それから親子は東京デイズニールランドを満喫。老舗ウナギ料理店では注文したうなぎが出てくるまでにとっても時間がかかることに閉口する経験もした。

旅を終えて帰国すると、その子は「僕はやっぱり中国が好きだな」と言いつつ、「その他の国も良いところがあるね」と付け加えたそうだ。

「百聞は一見にしかず」。ありふれているかもしれないが、日中関係で改めて大切にしたい言葉だ。

その意味で中国政府が自国民に訪日を控えるよう注意喚起したことは非常に気がかりだ。日本人の訪中者数も低迷している。中国特派員としてその実像を伝える責任の重さと難しさを痛感している。